

「人間とは一聖書の示す生き方」

第3回 人間の中にある罪

聖書の間観

1. 創造と世界：「創られたものとしての人間」「運命共同体としての世界」
2. 悪の現実：「人間の中にある罪」
3. 救済：「キリストに示された救い」

(1) 罪の根源性と謎

Q1：神が創造された世界にどうして悪が存在するのか。人生における不幸はなぜ。

創造の善性、では悪はどこから？

Q2：人間の罪は、どうしてかくも根深いのか。

詩編 51:1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。

2 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】

3 神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。

4 わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。

5 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。

6 あなたに、あなたのみにもわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません。

7 わたしは咎のうちに産み落とされ／母がわたしを身ごもったときも／わたしは罪のうちにあったのです。

- ・聖書の人間理解における現実主義：性善説と性悪説の間に人間の現実はある。

100%の善人も、100%の悪人もいない。

「義人にして罪人、罪人にして義人」(ルター)

- ・「罪」、キリスト教を理解しようとする際の躓きの石

(2) エデン物語における悪の起源

1. エデン物語(創世記2～3章)

「2:16 園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」

「3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」2 女は蛇に

答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてはいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」

2. エデン物語に基づいて考えるとき、罪はどこからやってきたことになるのか？
その場合の人間の責任とは？

↓

- ・ 神話という語り方の意義（言語的文学的機能）

解釈の多様性を残しつつ、人間にさらに考えることを促す。

- ・ ヘビ：善悪二元論

女：身体・欲望＝悪

男：自由意志論

神：神義論

↓

謎としての悪・罪

聖書において人間の罪と宇宙的悪とはリンクしている。

ノアの洪水物語、そして現代の環境危機

(3) エデン物語からキリスト教の罪理解へ

- ・ ユダヤ教における罪論の基本テキストではない。
- ・ 「アダム」は、人あるいは男？ 人類あるいは個人？

1. 「墮罪→原罪」というキリスト教的罪論における解釈

パウロ→アウグスティヌス→ルター

2. 原罪＝遺伝的罪（アウグスティヌス）

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12）

3. 関係の歪みとしての罪

- ・ 人間として生きることは、関わりの中で生きるということ

自己関係、他者関係、そして神関係

これらの諸関係の歪みはすべてつながっている

- ・ 小文字で単数形の罪 (sins) と、大文字で単数形の罪 (Sin)

4. 「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち、関係ということ

には関係が自己自身に関係するものなることが含まれている、——それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである」、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそは積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。自己自身に関係するところのそのような関係、すなわち自己、は自分で措定した者であるか、それとも他者によって措定されたものであるかのいずれかでなければならない」、「その関係すなわち第三者は更にまたその全関係を措定したところのものに関係するところの関係でもある。」(キルケゴール『死に至る病』岩波文庫)

人間は関係において生きている。

「祈り」の場面。神—自己—他者。

5. 罪の根源性、そして関係の歪みとしての罪 → 罪の連帯性

- ・「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ローマ7. 19)
- ・他者の犠牲において存在している人間
 - 生きるという罪、正しい忠告にあえて逆らう心の傾向
- ・知らないことにおける連帯責任

(4) 罪の問題の広がり

1. 罪の結果を被った側の視点から

キリスト教ではもっぱら罪を犯した者(罪人)の赦しに、議論が集約されてきた。

- ・恨(ハン)の神学
- ・宗教的救いと恨の関係
 - ハンは晴れるのか
 - 赦し得ない罪?

2. 人間の罪の射程 → 宇宙論的悪へ

環境破壊の問題: 知の変質 → 破壊

知の両義性

↓

科学技術の両義性

<参考文献>

1. キルケゴール 『死に至る病』岩波文庫。
2. 関根清三 『旧約における超越と象徴』東京大学出版会。
『旧約聖書の思想——24の断章』岩波書店。
『旧約聖書と哲学——現代の問いのなかの一神教』岩波書店。
3. 並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』教文館。
4. 森本あんり 『アジア神学講義』創文社。
第1章 アンドルー・パク 「罪」の補完概念としての「恨」